

びとごま

第6号
2015年7月

彫刻家の首藤晃さんが遊びに来てくれました♪

首藤晃さんは、昨年5月から8月にかけて美術博物館で行われた「中庭展示Vol.3」で、ロボットみたいな、宇宙人みたいな、今にも動き出しそうな、鉄と木で出来た不思議な面白くてカッコイイオブジェを見せてくれました。

首藤さんは、1969年生まれ、今年で46歳、菅更町に住んでいます。20代に彫刻をちゃんとやるようになり、知らないうちに彫刻家と呼ばれるようになったそうです。

(中村風香記者)

首藤さんの作品たち

首藤さんに自分のお気に入りの作品を教してもらいました。不思議な生き物がなにかをしている瞬間を表現したような三部作が印象深いそうで、それぞれどんな瞬間をとらえているのか、その後どんなことがおこるのか、など首藤さんが想像した物語を教えてくださいました。そして彫刻自体がどうのように考えているか、モチーフになった生物や動物にどんな特性があるかなどとても詳しく考えられているのが、興味深かったです。

(藤沢レオ)

《RUN (壁際を早く走る)》
2011



《境界を行く》2009

《その時を待つ》2011



オーギュスト・ロダン

《ジャン・テールの裸体習作》

1886-89年頃

中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館蔵

私は入ってすぐにあった《ジャン・テールの裸体習作》が一番気に入りました。この作品はオーギュスト・ロダン(1840~1917年)が作りしました。最初に見て、力強い感じがしました。その後、首藤さんに話を聞きながら見ていくと、いろいろなことがわかってきました。1つ目は、作品に名前などの文字が書いてあることです。2つ目は上まぶたが出ていて、ひじのあたりにナゾの出っ張りがあり、3つ目は鍵をにぎっていることです。首藤さんは「いろんな角度から見るとおもしろい。私には『ふーん』と聞こえる」と言っていました。私はふだん、じっくり物を見ないけど、今回取材して首藤さんと同じ気持ちになりました。物をいろんな角度からじっくりと見るととてもおもしろかったし、楽しかったです。

(穴戸美友佳記者)

《ジャン・テールの裸体習作》は、正面から見ると力んでいるような感じがした。でもかかんで下から見上げると、力んでいるようで、優しい感じだし、でも力んでるし。力んでいるのに優しいが加わったように見えた。(中村風香記者)

《ジャン・テールの裸体習作》は、色々な角度から見ると、色々な表情に見える作品です。正面から見ると力んだ顔、下から見ると泣きそうな(かなしそうな)顔に見える。それに背骨のところへっこんでいる。そのへこみに手を置いたら抜けなくなりそうな気がした。この作品を見て、彫刻作品は「色々な角度から見ると色々な表情に見える」ことがわかった。

(伊藤なつみ記者)

旭川市彫刻美術館所蔵 日本近現代彫刻名品選 ロダンから現代へ

2015年4月25日(土) - 6月14日(日)

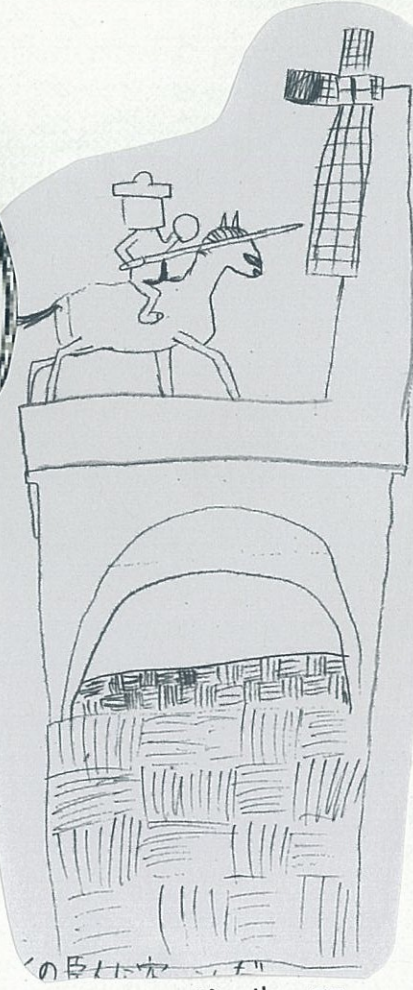
古小牧市美術博物館では、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館からお借りした貴重な作品の数々を展示し、日本の近代から現代の彫刻を紹介しました。6/7(日)、びとごま記者たちは彫刻家の首藤晃さんといっしょに展示を見学しました。一つの作品を色々な方向からすみずみまで鑑賞する首藤さんを真似て、正面だけでなく、下から、後ろから、横からじっくり見ると、色々な発見があったよ。

首藤さんから、入り口の目の前に「おもしろい作品があるよ。」と聞いた、その作品《ジャン・テールの裸体習作》が気に入って、ずっと見ていました。とくに気に入ったところは、背中から下半身のところまで、すごくいいこんでいたところが面白いと思いました。首藤さんから、ジャン・テールは「鍵をにぎっているんだよ」と聞いて、びっくりしました。

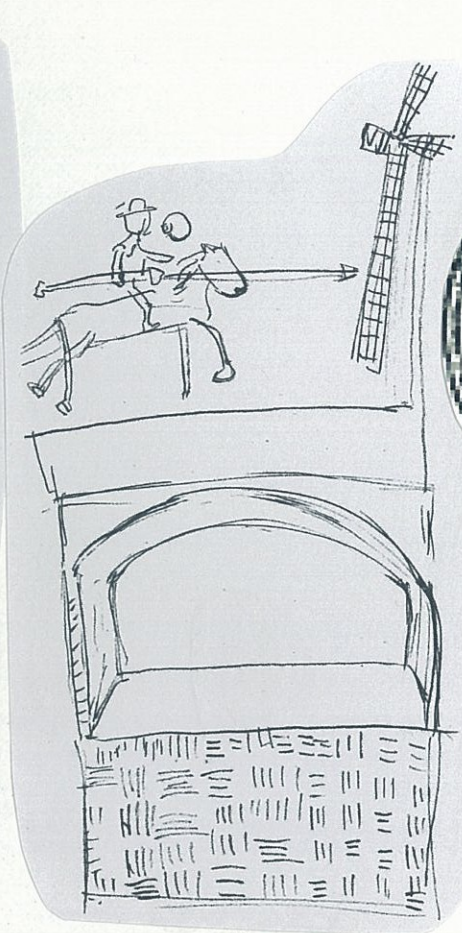
(中村創介記者)



《一番近くの巨人に突っこんだ》は、今回の展示の中で一番心に残った作品です。題名が気に入ってます。この作品は『ドン・キホーテ』というお話の中の一部で、主人公が風車を巨人だと思って、戦っている場面です。馬や馬に乗っている人、風車が細かく作られていて、特徴のある作品になっています。
(荒井聖記者)



絵・荒井聖



絵・山本舞羽

池田宗弘さんの《一番近くの巨人に突っこんだ》は、馬に乗った男の人が風車に向かって剣を突き刺そうとしている作品です。みなさんは、巨人なんていないのに、なぜタイトルに「巨人に突っこんだ…」と書いてあるのか不思議に思いませんか？この作品は『ドン・キホーテ』という物語の主人公ドン・キホーテが風車を巨人と思い込み、戦いを挑む…という部分を池田さんが作品にしたのだそうです。
(山本舞羽記者)

保井智貴さんの《untitled》を見た時、なぜuntitled（無題）という題名なのだろうと思いました。作品は、漆、麻布、らでん、岩絵具、にかわ、スペクトロライト、大理石で出来ています。
(本多こころ記者)



絵・本多こころ

絵・岡藍良

左：山本正道
《秋》1976年

右：保井智貴
《untitled》2004年
ともに中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館蔵

掛井五郎さんの《バンザイ・ヒル》は、バンザイをしている女性の像です。昔、戦争で日本が負けそうになったときに、島の女の子たちがバンザイをして丘から飛び降りたところが作品になっています。ヒルは丘という意味です。
(伊藤なつみ記者)



絵・伊藤あやな

舟越保武さんの《原の城》は人間が作られていた。男の人で、武士みたいな服を着ていた。なにより気になったのは目と口が空洞になっていることだった。少し前かがみになっていて、胸の辺りに十字があった。この状況は、今にもたおれそうだった。口から空気がぬけていた感じで、とてもこわかった。よく見ると、背中の辺りに文字が書いてあった。「寛永十五年如月二十八日原の城本丸にて没」と。読めないが、何かつまっている感じがした。
(宮脇寿珠記者)



掛井五郎
《バンザイ・ヒル》
1976年

中原悌二郎記念
旭川市彫刻美術館蔵

舟越保武さんの《アンナ》が気に入りました。理由は顔や首や服がキラキラしていたから。服の部分に「舟」とサインが彫ってありました。この作品は、やわらかく白い石でできているので汚れたり色が変わったりしないように、他の作品とは違って、アクリルのケースに入っていました。
(伊藤あやな記者)

《アンナ》と《原の城》は、同じ人の作品なのに、ぜんぜん違う雰囲気だったね。《アンナ》はキラキラと輝く大理石でできた優しいほほえむ女の人の顔。《原の城》は、暗い色の男の人の全身像。背中には「いえずきすと」「さんたまりあ」とも彫られているよ。原の城は、1637年の島原の乱でキリスト教徒たちが戦った場所なんだ。(おごちん)

この展覧会には3千人以上の人が見に来てくれました。記者たちに人気のあったロダンの《ジャン・テールの裸体習作》は、お客さんたちからも注目を集めていました。今回、「彫刻のまち」として有名な旭川市の中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館から作品をお借りしましたが、古小牧でも市民文化公園や駅前広場など町のあちこちで彫刻を見ることができます。美術館の中庭でも春から秋まで立体作品を展示しています。ふだんは見逃してしまうけれど、じつは身近なところにある彫刻。色々な作品があるので君もお気に入りの作品を探してみませんか？(学芸員 細矢久人)

びとこま第16号 (2015年7月発行)
発行： 苫小牧市美術館
企画： NPO法人樽前artyプラス
製作： 苫小牧市美術館、こども広報部、NPO法人樽前artyプラス
取材： 荒井聖、伊藤なつみ、伊藤あやな、岡藍良、熊谷陽奈、黒滝直人、宍戸美友佳、中村創介、中村風香、本多こころ、宮脇寿珠、麦島怜奈、山田和佳、山本舞羽
編集： 小河けい(NPO法人樽前artyプラス)